



岡本駿一郎さん

(1928-2004)

## 「包容力」教えてくれた

## 教育新世紀

多くの人のように英語を初めて学んだのは中学校に入ってからだが、先生は最初からずっと病気で休んでいた。だから、授業はいつも自習。ノートにアルファベットを活字体や筆記体で書き続ける毎日だった。

やっと先生が姿を見せたのは二学期になってから。それが、忘れられない恩師となる岡本駿一郎先生(73)だった。

ところが、待ちに待った先生は英語が得意ではなかった。教員が足りずに英語も教えていたが、本来は国語の先生。生意気盛りの中学生にとっては、いいえじぎだった。

本屋で立ち読みして覚えたばかりの英語の知識を授業中にぶつけては、「そんなことも知らないの」とばかりにした。

「ほかの先生なら、頭の一つもこづかれるところだが、先生は『そうか。よく知ってるな』と軽く受け流してくれた」

演劇部員と顧問の間柄でもあった。「岡本さん、この本おもしろいよ、読んだら」。部活動中のこんなため口も受け止めてくれた。

入学早々、親が心配して家庭教師をつけたこともあったが、先生に英語の知識があまりないから自分でしなければと、興味にまかせて独学した。

「しかし、先生には大人の包容力というものを教えてもらったような気がする。家族以外で初めて会った大人という感じだった。知らないのに知っているふりをする先生もいたから」

高校と大学は青山学院で過ごし、英字紙に就職。渡米して現地紙の記者も経験した。いつも先生のように「他人に寛容に」と思うが、なかなかできない。

先生は校長を最後に定年退職後、都内の神社で神職をしているが、「彼のようなやんちゃな子が好きでしたね」と振り返る。

今でも忘れないのは、卒業文集に先生が書いたメッセージ。「私はいい英語の教師ではないかもしれないが、いい教師になりたい」

2001年1月8日  
読売新聞